

39. 《富士山噴火の復興で、神様になった伊奈忠順（ただのぶ）》

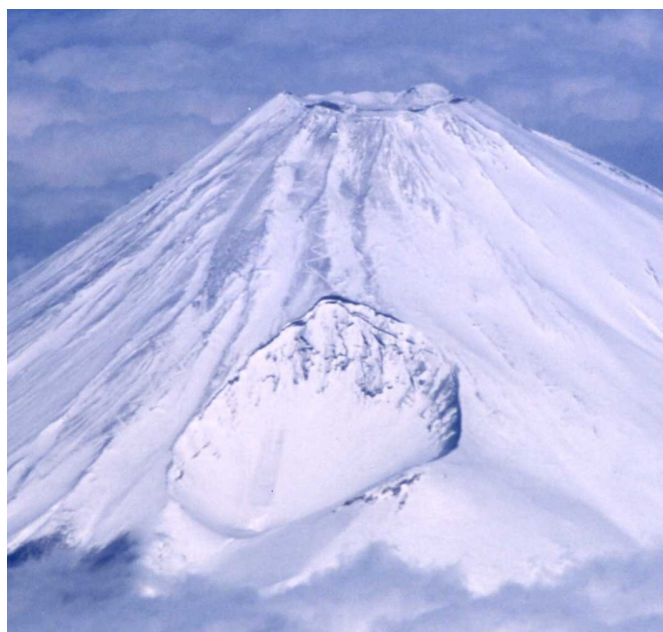
1707年（宝永4）10月28日、静岡から高知辺りまでを震源域とする巨大地震（宝永大地震）が発生します。この地震で、静岡県にある安部川（あべかわ）源流の山が崩壊し、大谷崩れ（おおやくずれ：日本3大崩れの一つ）ができました。

そして今度は、その喪のあける49日後に、富士山が噴火（宝永噴火）します。このとき降灰の激しかった東山麓は、小田原藩でした。幕府は、広大な被災地を直轄領地に編入して復旧復興事業を進めます。事業は、関東郡代（今でいえば関東地方整備局長）の伊奈忠順に、砂除川浚奉行（すなよけわわざらえぶぎょう）を兼務させ、進められました。この伊奈家は、江戸開幕のときから関東地方の国づくりをしてきた土木技術者の家系で、忠順は7代目です。

しかし復興半ばで運悪く将軍が変わり、忠順は、無断でコメを窮民に与えた責任を問われ、42歳の若さで切腹。地元には忠順を祀（まつ）った伊奈神社が建立されています。

写真は、①宝永噴火口（地質調査総合センターHPより）、②崩れた土砂量は約1億2000万m³と推定される大谷崩れ（静岡河川事務所HPより）、③伊奈神社にある忠順像（静岡大学防災総合センターHPより）

①



②



③



伊奈忠順の像
(写真提供/NPO法人 砂防広報センター)